

愛の試練 *Allegro moderato*

赤津将大

すでにぬかるむ荒野の夢見に

方々で降る、小鳥の線

鼓のまるみが嵐を転がし

疾走する

燃え尽くすまで振られる指揮棒に

——裏では水晶が電線のように

男と女の声が沈黙の顔を結んで

むこうの原林

下闇の水が自分の腹を舐めている

取り巻く力強い生命の数々

ぱらぱらと舞い

ゆつくり流れる舞燈籠に昼の星屑

葉隙の結び目もあかるくほどけて

足場がない

魂の

白い涙が幾つもの体から流れしたこと

かつて 彼や彼女とただ一つの心を揉み  
実の抱擁をした

肋骨や腕の潜る音から 沖へ

ひろがるあたたかみに一滴の

あなたが無限に垂れ

光が落ちた

潤う夜をまつすぐと絶え

親指の弧で拭うように

あなたはしやがんで見つめてくれている

仄暗く浮かぶ翠玉の縁に

空の靴

熱いきぼうの厚みを踏んづけ

ぼとぼと横たわる成人

たのしいかいさなあしが聴こえて

眠りの工房は空にある

冷氣と後光を放つ青年の

チエンバロの金糸刺繡に洗練された袖も

舞踏曲は遍く交響する

死後と生後のかさなりにしろいたいきはせなかで抱擁する

その腕に ふたなりの明滅を感じ

うつくしい

意識も漏らさず倒れた者が

言葉を漏らして立ち尽くす

肅々と歩行、苛立ちはわずかな火の粉  
尊ぶべし

高い襟を鼻まで潜らせて深く

鋭い光を鳩尾まで集めろ

腕を伸ばせ、俯いて

関節を讃美しろ

鏡よ鏡、この世でいちばん美しいのは鏡

誰にも示さず、ペンタクルを書記しろ

世界は闇だ

だが待つな、時間など存在しない

婚姻を取り持て、鈍間な僧侶の服だけパクつて

今に闇はあかるい

ゆらり かさなり

鉄の膝から立ち上がる

なおもピアノや弦楽が

枝幹に纏わり黒く沈めて

ステンドグラスは煌びやかである

白い水面の連弾も 明白な調で階調を成し  
収まる 窪溜まりの薄い固定に

もたげた首が重くなり

吹き抜ける

奥の

虚空に翡翠のビーズが一つ

うつされる

引き裂かれた固い腕が一つずつ  
無数に隊列している

ぐつたりとしたあなたの顔や  
わたしの胸

肌は品位をすらつと保ち

古く湿った壁龕で 一斉に

静謐を呼吸している